慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	インド・ベンガル地方の女神信仰と村落社会
Sub Title	
Author	外川, 昌彦(Togawa, Masahiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2001
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.52 (2001.) ,p.88- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000052-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

博　士（平成12年度）
社会学博士（平成12年7月12日）

甲　第1845号　外川　昌彦

インド・ベンガル地方の女神信仰と村落社会

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学文学部教授・
　　大学院社会学研究科委員
　　文学博士　　鈴木　正崇
副査　慶應義塾大学名誉教授・
　　國學院大學文学部教授
　　文学博士　　宮家　　準
副査　東海大学文学部教授
　　Ph.D.　　臼田　雅之

論文審査の要旨

本論文は，インド・西ベンガル州での村落調査に基づいて，女神信仰と村落寺院の関係を祭祀組織を通して研究し，ヒンドゥー社会の多様な側面を明らかにした。調査地は，ブラフマン（バラモン）から不可触民までを含む，18のカースト集団から構成される村落である。筆者は，インドに通算で5年間滞在し，そのうちの1994年2月より1995年5月までの1年4カ月の間，この村落に住み込んで調査を実施し，家庭・親族・カースト・村落の祭祀を，地域のヒンドゥー王権との関わりを含めて，総合的に検討した。極めて多岐にわたる村落での調査資料を，社会階層の関係性に焦点を合わせて，相互に関連付けて考察した点に，大きな特徴があると言える。論文は全4部からなる。構成は調査地の社会構成に従って，第1部は村落，第2部は王権とジョガッダ女神，第3部はリネージやカーストの多様な女神，第4部は家庭の祭祀を論じ，女神信仰を基軸として，多様な角度から村落社会の在り方を明らかにした。構成は以下の通りである。

序　論
第1部　村落の概況
　第1章　ベンガル農村社会の歴史的背景
　第2章　調査村の社会的背景
　第3章　調査村の歴史的背景
第2部　ヒンドゥー王権と女神
　第1章　ジョガッダ女神寺院の祭祀組織
　第2章　ジョガッダ女神寺院の年中行事
　第3章　ジョガッダ女神寺院の儀礼
　第4章　ジョガッダ女神祭祀と村落
第3部　村落社会と女神
　第1章　寺院祭祀と村落祭祀
　第2章　ドゥルガ女神祭祀
　第3章　モノシャ女神祭祀
　第4章　農耕儀礼
第4部　家庭祭祀と女神
　第1章　ベンガルのブロト儀礼
　第2章　調査村におけるブロト儀礼
　第3章　ショスティ女神のブロト儀礼
　第4章　少女によるブロト儀礼
　第5章　ラクシュミー女神のブロト儀礼
　第6章　その他のブロト儀礼
　第7章　ブロト儀礼と女性
結　論
付　録　ブロト物語のテキスト

序論はベンガルの農村に関する人類学的研究を概観し，研究上の問題点を指摘して，本論文の意図を明確にする。目標は体系的な民俗誌の構築による多様な論点の統一的理解への方向である。最初に，ベンガル地方に関する民俗誌のうち，植民地下のイギリス行政官の地域研究と，成立期の人類学の研究を，研究対象と方法論の偏りを指摘した上で，批判的に検討する。これと平行して，イギリス社会人類学を移入して発展したカルカッタを中心としたインドでの人類学の形成を概観し，機能主義が導入されて，その後の研究を規定していく経緯が述べられる。1950年代以降は，シュリニヴァス(Srinivas)やマリオット(Marriot)の大伝統と小伝統，サンスクリット化などの概念による構造・機能論的インド理解が，次第にデュモン(Dumont)の浄―不浄による階層化や宗教性の卓越性という構造主義的見解にとって代わられ，大きく展開したことを指摘する。構造主義の革新性と問題点が検討されたが，この視点を導入した上で，ベンガル社会を地道な資料を積み重ねて理解するような人類学的成果はあまり多くないという。1980年代以降の文化人類学では，ポスト・デュモン的枠組みとして，ブラフマン司祭のカースト内での位置付けの再検討，現世放棄者とヒンドゥー王権論への着目が挙げられ，本論文では，特に王権論について，村落での詳細な調査に基づき，女神信仰を中核にして，王権と社会が相互に結び付けられていく重層的な過程を考察したと述べる。これは，従来

のデュモンの議論に典型的に見られる全体論的な分析枠組みの限界を克服する試みでもある。

以上の見解を通して，村落の多様な社会組織に注目し，女神信仰と王権の関係を体系的に示し，それを通時的に記述すると共に，共時的に分析するという本論文を貫く二つの大きな問題意識が明確になる。これは，具体的なベンガルの農村の事例を通して，近年の人類学的研究の様々な問題を克服する方法を考えるという，記述と理論の統合を図るきわめて野心的な試みと言える。この課題の達成のために，調査地のボルドマン県キログラム村は，西ベンガル地方の数多い村落の中から，時間をかけて極めて慎重に選択された。ここでは広域的な民俗資料に基づいてこの村落を選択した理由が述べられ，村落の歴史的背景を概観し，王権と結びつく女神の聖地(*sakta-pitha*)であることが明らかにされる。そして，インド亜大陸全域に分布する女神の聖地の性格と，ベンガルで中世後期以降に展開した女神の聖地の検討を交えて，調査地の村落をインド社会全体の中に位置付けた。

第1部では，村落の概況が明らかにされ，社会構成を主体に基礎構造が検討される。第1章では，ベンガル地方のカーストの歴史的形成が検討された。プラーナと呼ばれる古典籍の記述を通して，セーナ朝でクリン体制という独自のカースト組織が生成され，歴史的経緯の中でこのような身分体系が，「カースト」と呼ばれる社会体制に再編成されてゆく過程が検討された。特に，イギリス行政官の手で植民地統治の社会的枠組みとして，カーストが統治体制の一部に組みこまれ固定化されていく過程と，人種的形質による分類などを通して新たな認識の枠組みが与えられて行く過程が指摘されている。今日「カースト制度」として一括して認識されている社会組織が，「不変の身分制度」ではなく，長い歴史の中で，とりわけ植民地統治の過程で徐々に形成されてきたことが明示された。第2章では，調査地の社会的背景を歴史文献の検討も交えて論じ，現在の社会組織の生成過程を，村落社会を構成する18のカーストのそれぞれについて個別に検討している。カーストの歴史的形成を踏まえることで，ブラフマン内部の階層性や，ベンガル・クシャトリヤの問題，低カースト内の階層の発生など，カーストの複雑な成り立ちが明確になった。第3章では，村落の女神寺院を通したヒンドゥー王権との関わりが，歴史を遡って詳細に検討され，寺院の構成や寺院付の宗教施設の概要も，社会組織の変化の実態を踏まえて合わせて検討された。最後に，村落内での特別な女神の禁忌を，農耕儀礼や豊饒性の観念，セクシュアリティーの観念に結び付けて分析している。以上の考察により，女神の聖地という村落の宗教的背景を支える社会と歴史の在り方が明確になった。

第2部では，調査地最大の年中行事である，ジョガッダ女神寺院の祭祀における組織の構成を考察して王権との関連を明らかにした。寺院は村落内のカーストや地縁を儀礼的役職に組み込んで，村落の幾つかの社会組織の要をなしており，民衆と王権の連続的繋がりがよくわかる。第1章では，中世後期に成立したボルドマン王権と調査地との関係を，イギリス植民地期の土地台帳の史料と，現在観察される儀礼資料とを対比して論じている。特に，女神寺院と王権との結び付きは，寺院に寄進された免税地の配分に現れるとし，特に「チャクラン地」と呼ばれる，村落の様々な職能カーストに配分された免税地の配分に注目して，祭祀や土地を通した村落・ヒンドゥー王権・女神の相互関係が明らかになった。第2章では，年間を通した女神寺院における祭祀の構成の儀礼過程が検討され，日常的な儀礼に関わる祭祀組織の構成と，供犠の構成が王権によって寄進された供物などの資料を通じて検討している。第3章では，寺院での最大の祭祀，夏のボイシャク月の大祭の儀礼過程の分析で，大量の供犠があり，ヒンドゥー王権と村落の祭祀組織との強い結びつきが指摘された。第4章では，以上の歴史的・儀礼的な資料に基づいて，寺院の儀礼の特徴をまとめて示し，それがカーストの統合の契機となり，王権と村落は下からの動きによっても結び付くことを明らかにした。新たに明らかにされた知見は，以下の三点である。①ボルドマン王権は，村落社会の支配カーストとの間でザミンダール・ライオット関係として法的に承認される借地人関係に置かれていたが，同時に，それは様々な儀礼的結びつきをも伴うものであった。②その儀礼的な結びつきは，王権に大きく規定された儀礼の形態として，(a) 儀礼的な役割の配分，(b) 儀礼的な時間の掌握，(c) イニシエーションの強調の三つの特徴を持っていた。③ヒンドゥー王権は，在地社会の階層の延長によってその至上性が保証されるのではなく，それらを超越した次元での供儀の実践によって，自らの正統性が打ち立てられる。筆者は，供犠の実践が社会の階層性を生成するというホカート (Hocart) モデルを援用し，王権と在地社会との関係を理解するための王による超越的な役割配分という解釈モデルを提示する。ボルドマン王権は，ヒンドゥー教徒のみでなく，モスクやムスリム聖者 (*pir*) への土地賜与を行なっていたが，このような王の役割配分の機能は，領内のムスリム社会にも適用可能であること

が指摘された。これらの資料の分析によって，村落祭祀への儀礼的実践を通した王権の介入が，深くベンガルの村落社会の社会生活にも及んでいたことが明らかにされた。これは，ベンガル社会のヒンドゥー王権と地域社会との関わりを理解するための，極めて貴重な知見を与えるものと言える。

第3部では，村落の社会表象の中心である女神寺院と対比する形で，村落内の多様な儀礼組織の特徴を考察している。これによって王権と結び付く女神と，その周辺で信仰される民俗神とが，祭祀組織の構成を通して対比的に把握された。分析の焦点は，村落全体の祭祀よりも，村落のリネージ，カースト，パラ（集落），世帯，家庭など様々の社会レベルによって支えられる個別の祭祀にある。第1章では，村落の祭祀を通年で列挙し，ベンガルの民衆祭祀であるカリ女神，ジョゴダットリ女神，カルティックの供養（プジャ）などを挙げ，独立後にパトロン関係が再編成されて女神祭祀が再構成された経緯が検討された。第2章では，ドゥルガ女神を取り上げて，村落寺院の祭祀組織が，いかにして村落内でのパラの祭祀組織を組込むかを検討する。村落クシャトリヤの各リネージが組織する，「ショロ・アナ・プジャ」という自立的で継続的な女神祭祀のシステムも合わせて分析された。これによって，村落全体に関わる寺院の儀礼とリネージ祭祀との密接な関係性や，各リネージのドゥルガ女神祭祀が村落祭祀の儀礼体系へ組込まれる過程が明らかにされた。このような祭祀組織の形成過程の分析は，筆者が慶應義塾大学に提出した修士論文で検討したドゥルガ女神を主体とする都市祭礼，特にコミュニティ祭祀研究の延長上に位置付けられ，これまでの祭祀組織研究の深化を伺わせる。第3章では，ベンガル暦の雨季から雨季明けにかけて，不可触民であるバグディ司祭が組織する蛇の女神であるモノシャ女神祭祀が検討される。この女神にも，ボルドマン王権の寄進による土地や寺院があり，役職に基づく寺院への関与の存立基盤は王権に求められる。モノシャ祭祀は，低カーストの主宰する祭祀であると同時に，王権とも密接なつながりを持つ。ここではブラフマン司祭と不可触民との儀礼的な地位の「転倒」が見られ，日常的なカースト的関係が，王権による祭祀への介入を通して，儀礼的な逆転を見せる事例としても，非常に興味深い。第4章は，従来は取り上げられることの少なかった農耕儀礼の複合的様相が論じられて，農耕サイクルとの密接な関連が指摘された。村落の儀礼では，豊饒性の観念と連関した多様な象徴が生成され，それが複合して村落の農耕サイクルと結びついている。象徴やイデオロギーではなく，儀礼を具体的な農作業と結び付けて理解する視点の重要性が示された。

第4部では，ベンガルのブロト儀礼を中心とした家庭祭祀の問題を扱っている。ブロト儀礼は女性が断食をして歌をうたい，大地に鮮やかな文様を描いて女神を祀るなど多様な内容を持つ。最初に，多くの先行研究を検討して，ベンガル人研究者のブロト儀礼論を，文化史的観点と社会学的観点の二つに分類し，「古代的」「土着的」な要素の残存として原初に遡る観点に批判を加えている。次に，1980年代以降の文化人類学がジェンダー論と関わってきた状況を見て，ブロト儀礼のイデオロギー性を強調するデュベ(Dube)と，女性による主体的な儀礼の実践体系と見るワドゥリー(Wadley)の議論を対比的に検討した。また，研究を綜合したピアソン(Pearson)が，ブロトを女性に求められる行為規範を示す儀礼とし，女性の内的充足と禁欲修行の双方に関わるという主張を検討した。問題点としては，農村での具体的なブロト儀礼の詳細な検討が従来の研究では欠けていることを強調している。第2章では，このような観点から，ブロト儀礼を村落で徹底して調査し，体系的な民俗誌的記述を作り，従来のブロト儀礼論を再検討している。ブロト儀礼の通年のサイクルの実践と，民間に流布する儀礼テキストの記述を対照し，村落のブロト儀礼を，①ショスティ女神のブロト，②ラクシュミー女神のブロト，③少女の儀礼のブロト，④その他のブロトに分類して検討した。特に，女性が赤い紐を腕に巻きつけるビポッタリニ・ブロトを事例に取り上げ，担い手の社会的位置付けや，これを支える集団の相互作用を論じて，社会学的観点の重要性を強調する。第3章では，子供の出産に関わるショスティ女神に関わるブロト儀礼を論じている。ここでも通年サイクルから把握する観点を入れて，年間を通した六種類のショスティ儀礼を取り上げ，これを支える社会組織の特色を検討した。第4章は，少女に関わるブロト儀礼を取り上げ，プンニプクル，シブ，ジョムプクル，セジュティ，トゥショラ，シヴァラトリの六種のブロトに整理して分析した。第5章では，ラクシュミー女神のブロト儀礼が検討され，年間四回のロッキー・ブロトという既婚女性の儀礼を，一連の複合体として取り上げた。第6章は，チョンディ女神，ショドバ（既婚女性），ビドワ（寡婦）のブロト儀礼に整理して考察している。第7章では，ブロト儀礼の調査資料を通して，儀礼の意味を社会組織との関連で検討した。特に，ショスティ女神のブロト儀礼では，「ジャジマニ・プロヒトニ関係」と名付けられた女性によって構築されるパトロ

ン・クライアント関係や，女性が構築する階層関係が見られるという指摘は新しい見解である。また，「少女の雨乞い」などの誓願儀礼は，実際には一定の年齢に達した少女による規範的な儀礼であり，女性のライフサイクルの中でも社会化に関わる通過儀礼であることが指摘された。ブロト儀礼は，少女，思春期，娘，既婚女性，寡婦など女性の各年齢層に求められた儀礼の実践体系を構成する一連の儀礼複合として把握されている。これらの分析は，ブロト儀礼が，ジェンダーの社会的構成としてその役割を継続していることの指摘であり，この見解は，従来の研究を越えた包括的な儀礼理解の試みである。本論文は，多様な記述と考察を含み込みながらも，統一的な視野の下での理解が試みられている。

本論文は，民族誌の枠組を越えた記述と解釈の綜合化の試みとして評価できるが，その貢献は人類学と歴史学の双方に関わる。最初に，人類学の観点から整理すると以下のようになる。

第一は，ベンガル語を駆使した詳細な現地での事例研究に基づいて，村落の様々な儀礼と社会との関係性を，体系的に一つの視野の下に描き出し，考察を加えたことである。資料は，中世の王権から村の少女の儀礼まで多様であるが，従来は個別に論じられていた問題を，村落の女神祭祀を結節点とし，そこに集積される村落の様々な儀礼と社会の関係性を読み解くことで，体系的な分析を可能にしたと言える。単一村落の特定期間の調査資料に基づくことで，カーストや階層，世帯ごとの多様性を，相互に密接に連関した複合的なネットワークとして描き出し，その生活世界の広がりを明らかにしている。

第二は，儀礼の実践体系の多元的構成を明らかにしたことである。調査地の人々が王権の祭祀に関わりながら，同時にカーストやリネージの祭祀，さらには家庭内の祭祀に関わるという複合性に注目し，儀礼の実践体系では，その行為規範が各レヴェルで緊密に構成されつつも，同時に相互に影響を及ぼし，対立や葛藤の契機を含み込みながら，全体としては統合的な宗教性と社会性を維持している状況を明らかにしている。儀礼実践の中核には，ジョガッダ女神の祭祀組織が置かれており，最終的には，女神信仰の理解，それと密接に関連する王権のあり方がベンガル社会を理解する原点にあることが浮き彫りにされた。

第三は，王権を中心とした儀礼と権力の分析に歴史的観点が導入されて，研究に時間の深みが加えられたことである。イギリス植民地時代の土地資料を積極的に活用し，ベンガルの歴史を遡って考察し，土地制度に根ざした社会の存立基盤を明確にした上で，女神信仰を支える儀礼組織との強い結び付きを具体的に明らかにした。特に，生産システムの変化が，儀礼組織の生成を規定し，王権がこれを巧みに統御しつつも，在地社会からの諸要因によって変形を被るという動態的分析が提示されるなど，新資料を使っての村落と王権のせめぎあいの検討は，きわめて独創的である。王権と在地社会が，共に植民地下に大きく変化した状況にもよく目配りがされている。従来の王権の共時的な儀礼分析に，歴史的観点を導入した政治・社会の変動の変化が加えられ，権力に関する深い把握が試みられた。

第四は，従来は総合的な検討が加えられてこなかった家庭祭祀の研究を大きく前進させたことが挙げられよう。女性の儀礼実践であるブロト儀礼を通して，女性たちが独自に構築していく社会関係の諸相を描き，世帯内のジェンダーの構成が，女性の社会化過程や村落寺院の祭祀組織との関わりのもとで形成されていく様相が明らかにされている。これによって，女神信仰が王権から村落，更に家庭までも一貫して精神的基盤をなしていることが明確になった。また，近年では，女性の自立化に関する議論が盛んに行なわれているが，こうした文献に記録されてこなかった資料をどのように位置付け，在地の視点をいかにとりいれるかが課題であることが，改めて明らかにされたとも言えよう。

第五は，全体として本論文はベンガル農村の生活世界を眺望する体系的な民俗誌の記述をとりながら，王権やカースト，親族，ジェンダーなどの南アジア人類学の古典的課題から今日的な問題までを考察する野心的な試みとして評価できる。このような体系的な村落の分析による幅広い考察は，蓄積の厚い南アジアの人類学的研究の中でもほとんど類例がなく，地域研究の上でも新たな方法論と分析視角を提示し，従来の研究に見られない新たな試みとして評価できる。

一方，歴史学の観点からは，以下の点を評価すべき点として指摘出来る。

第一は，人類学だけでなく，ベンガル研究一般の成果に適切な目配りをしていることである。特に，第２部第１章では，ジョガッダ女神寺院の祭祀組織は，祭祀への奉仕義務と，それを可能にする王権から与えられた土地の相続権がセットになって継承されていく独自のシステムが祭祀組織を安定させたことを，植民地時代の土地文書の分析を通じて明らかにした。所有の現状分析を越えて歴史的に遡る研究は，日本におけるベンガル研究の最良の部分である土地制度史の成果を継承し，更に発展さ

せたと言えよう。1970年代から80年代のベンガルでの歴史学の成果を，人類学の領域によく移し代えていると言える。

第二は，村落と王権の問題についてで，1960年代以降のインドの人類学に大きな影響力を及ぼしたデュモンの社会論を批判する意図があるが，別の見方をすれば，本論文の研究成果は，現在，南アジア歴史学で大きな潮流をなすサバルタン研究に重大な一石を投じたことにある。従来の研究は，エリートとサバルタンは断絶し平行した政治領域を形成するという前提に立っていたが，これはサバルタンの領域があまりにないがしろにされているということにのみ意味のあることであって，多分に問題性を含んでいる。本研究はエリートとサバルタンの各領域の関係を具体的かつ詳細に描き出すことによって，新たな問題提起を行ない，人類学の枠を越えて検討されるべき課題を提示したと言える。

本論文の特色は，民俗誌の記述でありながら，体系性を持ち，各所で解釈が巧みに組み合わせられている点にある。これは，明確な理論的見通しをもって慎重に調査地を選定し，徹底的に調査することで可能になったとも言える。この村落には女神の聖地（シャクト・ピート）としての寺院があり，村落の多様な相互関係を結び付ける結節点として機能しているという点が，論文の性格を規定している。これは長所でもあるが，調査地の特殊性や地域的特色をベンガル全体に押し広げて考えることには若干の躊躇がある。また，単一村落での徹底した調査による考察としての意義は大きいが，特定の地域社会をやや完結的に描き過ぎることも問題点かもしれない。他の地域との比較による差異を考慮すれば，歴史的変化や植民地化の影響の差異がより明確に浮き彫りにされ，急速に進む社会変動の影響の考察が付加されてより現代的な民俗誌的研究になった可能性もある。

研究の焦点は，極めて正統的な人類学の手法による儀礼の分析にあり，それを社会組織の側から考察するという観点をとっていることから，現代の人類学の焦点となっている儀礼のイデオロギー性や実践共同体の研究から見ると，やや保守的な側面もある。現代の状況を幅広く取り込んだ考察は今後の課題となるであろう。また，分析手法は，時には従来の人類学理論の適用による強引な論証もあり，現地の概念や文脈に即して地元の側から生成されてくるような考察が加えられれば説得力を増したであろうと思われる事例研究も見受けられた。この点についてはベンガル語の能力を今後の研究に生かしていくことを期待したい。確かに，調査資料の蓄積は膨大であり，筆者の考察のようにある程度一貫性を持たせた解釈をしないと，資料の海に溺れてしまうとも言える。筆者はこの点について十分に自覚しており，多元的解釈の可能性を残すことを今後の課題として提示している。

最後に，ベンガル語の音写についてであるが，若干の問題点があり，鼻音記号の表記の揺れや，長音の表記に一貫性がないなどやや不統一の感があるが，これは筆者の問題というよりも口語と文語の差異，表記法の未整備など，今後の異文化記述の課題かもしれない。

いずれにしても，本論文では，特定村落における儀礼の実践体系を総体として描き出す意図は十分に実現され，その学術的価値は高い。特に，ベンガル語を駆使した厚みのある記述と解釈は，日本のベンガル研究ではこれまでにない業績である。豊富な資料と一貫した方法論によって貫かれた本研究は，細かい点では問題を残すとしても，全体としてはそのスケール・理論的展開・総合性からいって極めて大きな学術的貢献であると言える。

上記の審査の結果により，筆者は本論文によって博士（社会学）の学位を受けるに値するものと認められる。

社会学博士（平成12年10月11日）

甲　第1866号　山田　慎也

現代日本における葬儀と死生観の変容に関する民俗学的研究

〔論文審査担当者〕

主査　慶應義塾大学名誉教授・
　　國學院大學文学部教授
　　文学博士　　宮家　　準

副査　慶應義塾大学文学部教授・
　　大学院社会学研究科委員
　　文学博士　　鈴木　正崇

副査　大正大学文学部教授
　　文学博士　　藤井　正雄

論文審査の要旨

本論文は，葬儀が様々な位相における死を総合的に処理する装置であるという観点から，現代の日本の伝統的な葬儀と現代の葬儀を比較・対照し，その変化の過程を考察して，これに伴う死生観の変容を明らかにすることを目的としている。前半部では新潟県佐渡と和歌山県古座という地域社会において，伝統的な葬儀がどのように